

葛飾北斎の肖像画における自己演出

山本 陽子

葛飾北斎は著名であり長寿でもあっただけに、浮世絵師としてはかなり多くの肖像画が残されている。しかし北斎の自画像と他者の描いた肖像では、その容貌も雰囲気も全く異なっている。本論では、なぜそのような違いが生じたのか、そこにはどのような意図があったのかを考察したい。

1 北斎の自画像

北斎の肖像画に関する先行論文として、尾崎久弥「北斎肖像の研究」¹⁾と、これを受けて追加をした鈴木重三の「北斎肖像画のいろいろ」²⁾が知られている。本論では、まず尾崎の説に拠り、鈴木論を補って、自画像とされる作例を推定年齢の順に挙げたい。

① 埒外小咄本『間女畑』口絵見返し分右半丁所載の机に伏して眠り夢を見ている丁髷の男。七三にこちらを向いた丸顔で比較的若い(図1)。尾崎は「北斎が黄表紙に



図1 『間女畑』(自画像)

自画像を書き始めた」天明元年の22歳頃と推定し、序文の「猶是に容艶の姿をそへて、則ち間女畑と題するもヤッパリゆめゆめ」の言葉から、これを自画像と見る。

② 時太郎可候名義の自画像黄表紙『竈將軍勘略之巻』下巻最尾半丁に挨拶文と共に載る、巻いた絵絹類の載る机の前で羽織姿で両手をつき挨拶する男。七三に向いた丸顔の坊主頭で下がり眉、額には皺が3本描かれている(図2)。「紛れもない自画像」として、尾崎は文末の月日から寛政12年出版の前年、40歳の作とする。

③ 自画像黄表紙『児童文殊稚教訓』下巻初丁の、窓際に片肘を突き居眠る姿(図3)。七三向きのうつむき加減で、頭巾をかぶり下がり眉だが、額に皺はない。傍に「ごろうじまし、ねたかほつきのやほな事を」「へたさくしゃ可候」と書かれ、本文にも「何一つとりえのなき坊主(中略)漸くに拵へかけ、がっくりと気草臥して、思はずとろとろやらかす折節」とあり、尾崎は「紛るべくもない作者(時太郎可候)の自画像」といい、享和元年出版の前年、41歳の作とする³⁾。

④ 自画像黄表紙『不厨庖即席料理』上巻初丁裏の口上に添えて、片手をついて平伏し片手で盆を捧げる男(図4)。目鼻口の小さい横顔で丁髷がある。享和3年版で、口上から前年の43歳の作とされる。③より後にもかかわ



図2 『竈將軍勘略之巻』下巻(自画像)



図3 『児童文殊稚教訓』下巻(自画像)

らず有髪であることについて、尾崎は「料理屋亭主の如くなぞら擬えたせい」と解している。

⑤ 『略画早指南』第二編末尾半丁分の、丸窓内で文机を背にあぐらをかき頬杖を突く男(図5)。正面向きの禿頭で、小作りな眉と目鼻口が中央に集まった丸顔で、本文には「のらりくらの海鼠絵師云々」とある。文化11年、55歳の稿といい、尾崎は「彼の正面描きの自画像として、本は平凡なれど、絵としては、珍である。」という。

⑥ 版元嵩山房宛の彫りに関する依頼の手紙に描かれた両手に一本ずつ杖状のものをつき、尻端折をした老人(図6)。飯島虚心『葛飾北斎伝』上巻第五十五丁表にも載り、横顔で襟足の上に毛が残った禿頭で口を開けた様子。手紙には「右や左りの書林様、ア、かなひませぬ、ゑかアきには何も後生と、御ぼしめし、」とあるので、尾崎は、これに照応し「自分を老乞食の体に描いてゐる」と見る。天保6年、76歳の折という。



図4 『不厨庖即席料理』上巻(自画像)



図5 『略画早指南』(自画像)



図6 嵩山房宛彫りに関する書状より(自画像)

⑦ 百人一首の絵の依頼に関連して嵩山房へ送ったもの(図7)⁵⁾。飯島虚心『葛飾北斎伝』下巻第十四丁表に載り、虚心は「これ翁が自画の像にして、頭に覆ひたるは五布蒲団なるべし。前に置きたるは漚瓶なり、これまた翁が老ひて猶赤貧なりし形状を想像するに足るものなり」という。ただしこれは署名が1行目にあり上部の駄洒落が和歌仕立てであるので、百人一首の絵札に見立てたものであろう。頭から蒲団をかぶった横顔で、顔にもむき出しの足にも皺はない。尾崎は先の手紙と同時期の天保6年、76歳頃のものとする。

⑧ 尾崎が「第二回浮世絵総合展の北斎室に掲げられたもの」と書く、現在はオランダのライデン国立民族学博物館所蔵となっているもの(図8)⁶⁾。「他に贈った旧画稿の終り、余白に書かれたもの」といい、絵の左に「八十三歳八右衛門右申上候以上」とある。袖無し羽織を着て座り、左手をつき右手を挙げる。七三で顔を振り向き、鬢の毛がぼうぼうと乱れ、額や目尻、口元に皺の描かれた顔、喉元や手も骨張って皺が多い。目は小さく口を開く。

鈴木重三はこれら8例の自画像に加えて、2例を紹介する。その一は福本和夫が『北斎の研究』の「北斎の肖像画について」⁷⁾に、76歳頃の自画像として挙げた『道中画譜』口絵の古本屋の店頭で杖を突いている後姿の老人である。しかし該当書は北斎門人魚屋北溪の作を部分的に改変したものとされるので、鈴木はこの箇所が北斎の筆であることを疑う。福本は「表面上やはり北斎の著書である以上、その巻頭口絵に著者近影である北斎像を掲げてもおかしくはない筈だ。」とするが、いずれにしても当該箇所は自画像にはあたらない⁸⁾。

⑨ 2例目は鈴木論文に高橋誠一郎が挙げた⁹⁾とある『画本両筆(両筆画譜)』最終丁半丁の筆をなめようとする方の人物である(図9)。斜め後姿で、鈴木は後頭部に低く髷を結っていると指摘している。該当本は文政頃の刊行とされるので50代後半から70歳頃の作となり、より若い②が坊主頭であるのと矛盾するということであろう。頭の形や体つきは丸みを帯び、顎はやや小さい。

この他に近年、自画像として紹介されたものが、



図7 嵩山房宛百人一首に関する書状より(自画像)



図8 ライデン国立民族学博物館所蔵(部分)(自画像)



図9 『画本両筆(両筆画譜)』(自画像)

いくつかあるので、以下に挙げたい。

⑩ 朝日新聞に「北斎描いてた自分の横顔」¹⁰⁾として紹介された「何屋何兵衛様宛」借金証文(個人蔵)中の横顔(図10)。金を受け取りに行く者として「眼の小キ鼻之大き成白髪の本モジャモジャと致候親父」の北斎の顔と「腮の四角ナ女」の三女応為の顔が描かれている。住所は亀沢町とあり、小布施の地に伝来したので、北斎が亀沢町に住み、初めて小布施を訪れた天保13年(1842年)以降、80歳代の作品とされる¹¹⁾。朝日新聞の記事で墨田区北斎館解説準備室の伊藤めぐみは、「『面長で厳しい顔つき』という従来のイメージを覆すもので、好々爺然としたイメージで描かれている。」と評す。輪郭はごつごつし鼻は高いが頭の形は丸く、後頭部に頭髮がぼさぼさと描かれている。

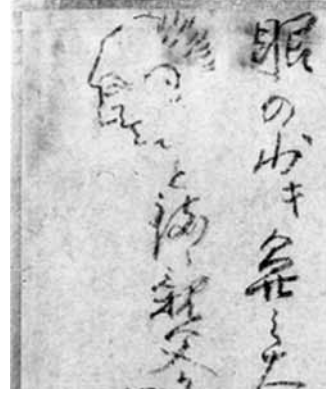


図10 「何屋何兵衛様宛」借金証文より(自画像)

また「自画賛」と書かれた「漁師図」について、日本浮世絵博物館による自画像としての発表が「北斎のイメージ変わる!？」として報道されたことがある。しかし永田生慈の朝日新聞における「自画賛では自分の姿を描いたとはいえない。北斎は酒も飲まずたばこも吸わなかったと『北斎伝』に記されている。この絵を自画像に結びつける根拠は何もない。」という談のごとく、自画像であることは否定されている¹²⁾。

また自画像とされるものに、2013年の熊本県立美術館「北斎展—世界が絶賛した浮世絵師—」や豊橋市二川宿本陣資料館「画人 北斎の足跡」に展示された、中右瑛コレクションの腕を組んで座る丸い頭の老人の墨絵があるが、実見できず、自画像である根拠について知るところがないので、本論では扱わない。

このほかウィキペディアの葛飾北斎の項目に、「自画像(天保10年(1839年)頃)」として立像で杖を突く像、および「天保13年(1842年)、82歳(数え年83歳)頃の自画像(一部)」とある髪を振り乱し目を剥く老人の首が図版写真入りで掲げられている¹³⁾。前者は次章で扱う他者による肖像といわれる作品の写しか草稿と見られ、少なくとも自画像ではない。後者は図版の出典を追ったものの現状では不明であり、仮に北斎の自筆であったとしても自画像とする根拠について知るところがないので、本論では扱わない¹⁴⁾。

2 他者が描いた北斎の肖像

さきの尾崎論文は、他者の描いた肖像について「他者の北斎像」と「誤られたる北斎像?」に分けるかたちで挙げている。このうち「他者の北斎像」として挙げられるのは、

⑪ 歌川国芳画『日本奇人伝』の下巻第三十四丁表に、滝沢馬琴と光明皇后と共に描

かれる、「筆洗と硯を右に揮毫の体のもの」(図11)で、羽織を着用したあらたまった姿である。刊行年は不明であるが、鈴木は同本中で溪斎英泉を死者としていることから嘉永元年以降とし、これは北斎の89歳以降最晩年、にあたる。それにしては後頭部に残った髪は黒く、まだ鬢髻として見えるが、『葛飾北斎伝』には、国芳が北斎に一度だけ面会を許され、「画法を談じ、大に得る所ありしと」書かれる¹⁵⁾ので、国芳がかつて面会した時の印象によるもの、あるいは北斎に敬意を払って実際より老いていない姿に描いた可能性はあろう。国芳は「魚の心」等があるように、顔の特徴を捉えた似顔絵にも優れているので、顔立ちの描写は信頼できると思われる。他の人物描写と比較しても極めて具体的で、しっかりした大柄の骨格に、面長の顔にがっしりした顎と高い頬骨と高めの鼻を持ち、眼は小さく眉は太め、眉間と眼の周囲と目尻、頬に皺が描かれている。



図11 歌川国芳画『日本奇人伝』より北斎像

⑫-1『新增補浮世絵類考』66頁の次に挿入された挿絵¹⁶⁾で、葛飾北斎肖像として尾形月耕縮写とある、羽織を着用し、七三に向いて座り体前で手を束ねた坊主頭のものである。尾崎は原画が何か不明としているが、鈴木が論文中で、木村黙老『戯作者考補遺』の溪斎英泉の描く「為一翁(北斎の別号)」¹⁷⁾に基づく挿絵⑫-2(図12)¹⁸⁾と姿が一致し、これを原画としたものであろうと指摘している。顔は『新增補浮世絵類考』よりもさらに長く、一文字眉に高い鼻と大きながっしりした顎を持ち、額と眼の周囲と目尻、口元に皺が描かれている。



図12 溪斎英泉画『戯作者考補遺』より為一翁(北斎)

さらに鈴木は、露木為一による「北斎居宅図」を挙げている。現在、国立国会図書館に「北斎仮宅之図」(図13)として所蔵される¹⁹⁾、弟子の露木孔彰(為一)が北斎と娘のお栄の生活ぶりを描いたものである。久保田洋一²⁰⁾は添文から天保14年から15年、84歳から85歳頃の様子と推測する。北斎は炬燵に入ったまま筆を執る姿だが、禿頭と額の皺、白髪の眉毛、眼の周囲の皺は⑫に似ているものの、顔の下半分は柱の陰になって見えない。

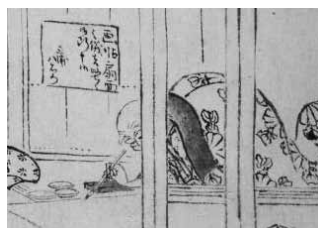


図13 露木為一「北斎仮宅之図」(部分)北斎

⑬ このほか、『葛飾北斎伝』にある名古屋で大達磨を描いた場面の原図にあたる、猿猴庵の『北

斎大画即書細図』²¹⁾第七丁表に達磨を描く北斎(図14)がある。文化17年、北斎58歳の出来事で、黒紋付に袴で大筆を持つ北斎はまだ髪は黒く鬘を結び、他者に比して長い顔に、二重瞼でやや垂れた目尻と口元に皺がていねいに描かれる。猿猴庵は絵こそ素人であるが、直接北斎に会っているのも、本人が実際に受けた印象とはさほど掛け離れていないと思われる。



図14 猿猴庵『北斎大画即書細図』より北斎部分

3 「誤られたる北斎像」とされるもの

この他に、尾崎が「誤られたる北斎像？」として挙げている3種類の肖像がある。

⑭ フェノロサ解説のCatalogue of the exhibition of paintings of Hokusai, held at the Japan Fine Art Association, Uyeno Park, Tokyo, 13th to 30th January, 1900.²²⁾に第119号として掲載される、小林文七旧蔵、フリア美術館所蔵の画稿(図15)²³⁾。画稿の中央にある墨線描きの老人の頭部で傍らに「葛飾の翁」と書かれる。面長で顎がややしゃくれた鼻の大きい眼の小さい顔で、頭髪は描かれず、白髪の眉毛はぼさぼさと伸び、額や口の周囲、首には皺が重ねられている。フェノロサの解説には文政5年とあり、北斎は63歳にあたる。



図15 フリア美術館所蔵画稿より「葛飾の翁」

⑮ 同じくフェノロサ解説のカタログ第191図で、格子模様の袖無し羽織を着て杖を突いて立ち、振り返る老人の全身像(図16)。門人為斎の家から出たものという。フェノロサは天保5年の自画像と解説し、北斎は75歳ということになるが、尾崎はフェノロサの年齢設定の根拠を不明とする。この形状のものは、ギメ美術館に自画像として所蔵される墨と代赭の2色で描かれた草稿と覚しき作例²⁴⁾、久保田洋一が挙げる『浮世絵標準画集 第10巻 北斎』に応為筆の「北斎肖像」として掲載される陰影が施された作例²⁵⁾、フリア美術館・ホノルル美術館・オーストリア美術館等に所蔵される「明治三十三年八月製 東京 小林文七蔵版」とある格子模様の袖無し羽織の複製品、



図16 フェノロサ解説カタログ第191図

福本和夫が掲載する石黒敬七旧蔵やこれもフリア美術館所蔵の、無地の袖無し羽織で修正や紙貼り跡まで再現した「明治三十三年八月製 東京 小林文七蔵版」の複製品など、類例が多い。顔貌を⑭と比較すると、顔の下半分がやや長く、細い眼が丁寧に描かれ、皺がやや規則的である。側頭部には短い髪がまばらに描かれている。

⑯ 飯島虚心『葛飾北斎伝』やフェノロサ解説のカタログやゴンクールの著書 Hokousai の口絵に使われた、胸元から上の像で上部に「葛飾北斎翁之肖像」と横書きであるもの(図17)。⑯の頭部と同様に、頭頂が尖り眉骨が出て、四角張った長い顔、側頭部には毛髪がまばらに生え、口の周囲と顎にも短い無精髭がちょぼちょぼとある。額、眼の周囲と目尻、口元、顎に皺が重ねて描かれる。虚心は『葛飾北斎伝』中でこの図について、割註で「巻主にある翁の肖像は、白井、本間、小林諸氏のすゝめによりて、掲げたるのみ。」と、消極的な言い回しをしている。

尾崎は、この⑭⑯⑰の3系統の顔貌がよく似ていることを指摘し、「同系、同人を取り扱ったもの」とする。尾崎はまず⑭の素描に添えられた「葛飾の翁」という言葉について、これが北斎自身による書き入れとすれば、「かつしかおやぢ」とは自称しても、自らの肖像に敬称の含みがあるこの表現を使うまい、一部の説²⁶⁾の如く隣家の家主を描いたものであろうとする。その上で、この図を指標として⑯を北斎自身の像としてしまったと見、さらに⑰も、「元より此の図があったのではなく」⑯から「作為せられたもの」とする。⑭の「葛飾の翁」が北斎でなければ、この三系統の全てが「誤られたる北斎像」ということになるという。

この尾崎の論に拠れば、北斎の肖像画として最も著名な⑯⑰が、別人ということになる。これについては鈴木もその説を紹介するのみで、自身の見解を述べていない。

これについて近年、伊藤めぐみが「追考『葛飾北斎伝』の北斎肖像をめぐる」²⁷⁾において⑰を扱い、虚心は明治33年の「北斎絵大展覽会」の別人名義の批評中で、絵の出品者森氏の言として「この肖像画ハ固より北斎にあらず、翁の娘阿栄が、画きしとて、白井氏に伝へたるものなり、同氏も何人の像なるを知らざりしか、(後略)」と、北斎の肖像であることを否定したことを紹介している。しかし一方で、出品者の森氏に会った可能性のあるフェノロサが、同展目録第221(図版なし)の森の叔父で北斎の弟子であった戴辰の北斎肖像について、原作となる北斎自身による習作が4点あったと書き、絵の原作者も描かれた人物も、北斎である可能性を示唆しているので、北斎の肖像ではないと断定しきれないといい、「現時点では、作者は不詳であり描かれた人物についてもまた同様とせざるを得ない」とする。

また久保田洋一は、⑰の肖像は隣家の老人のものであると飯島が言ったという井上雨石の記事(註26参照)を紹介している(註12参照)。ただしこの情報は、雨石自身



図17 フェノロサ解説カタログ
第191図「葛飾北斎翁之肖像」

が「玉石同架的」記事であると評する行旅雅人の「浮世絵師の墓」（『現代』11月号）に拠り、虚心による「北斎絵大展覧会」批評記事の内容とも齟齬する面があるので、決定的とまでは言い難い。

もともと尾崎の説は、⑭の「葛飾の翁」という書き入れが北斎自身の筆であるという前提に立ったものである。「此の文字、北斎自身ならず、後人の書入といふならば、私の推定は、根本から駄目である。」と尾崎自身も言う。しかしこの文字について、検証はいまだ行われていない。さらに⑮と⑯が、果たして⑭の草稿の顔貌に基づいたものか否かも、検討すべき問題であろう。⑭の所在が不明で実見できないことに加え、⑮と⑯には複数の草稿があるとされることも、混迷を深める要因となっている。それでも⑭にはなかったはずの頭髮や無精髭が⑮⑯とその類品の一部に描かれていること、⑭にはなかった目の下の半月型の皺が⑮や⑯に描かれていることなどの相違が見出され、この3系統の関係についても再考する必要があるだろう。いずれにしても現時点では、⑭⑮⑯の3系統が北斎の像か否かには明確な結論が出せず、保留とするほかはない。

4 北斎の実像

これら真偽不明の3系統の北斎像を除外しても、北斎には相当数の自画像と、他者による肖像が存在する。現実の北斎はどのような顔貌であったかについて、尾崎は自画像のうち料亭の主人に扮した④を除く①から⑧の7件の自画像について「全部を並べれば、凡てに相似点があり、結局同一人であり、これにより北斎の真顔が彷彿たるものであらうと思ふ。」とまとめる。尾崎の見解を紹介した鈴木も、「いずれをとり、いずれを捨てるか、人によって意見の相違するところであろう。（中略）しかし同時代の画家が、北斎画像と銘うって描いたものは一応信憑性があると見るのは当然であり、他は今少しく吟味検討の場を経てから採否をきめるのが常識的ではあるが研究の常道ではなからうか。」と結ぶ。

それでも決着が付いたという話を聞かないのは、さきの3系統の肖像を別にしても、自画像の一群と、国芳や英泉の描いた北斎像とでは、印象が全く異なるためであろう。尾崎は、自画像の後に国芳の北斎像を挙げて「又これに次いで、さすがに似てゐることも頷けよう。」というが、鈴木はこの箇所を引いていない。尾崎の挙げた自画像群と国芳の北斎像とが「さすがに似てゐる」という部分に同意し難かったためであろう。

ちなみに、さきの⑯に関する伊藤めぐみの説を紹介した朝日新聞の記事（註12参照）のタイトルも、「北斎どんな顔だった？「面長」「丸顔」「切れ長」「たれ目」…諸説」であった。実際、記事に列挙される肖像から問題の「漁師図」⑮の立ち姿と⑯の胸から上の像を引いて、確かとされる83歳の自画像⑧と溪斎英泉筆の肖像⑫-2を比較するだけでも、丸顔と面長、もじゃもじゃ髪と坊主頭と、同一人物とは思えないほどに相違している。

そこでこれらの特徴を一覧にしたのが、表「北斎の肖像画」である。①～⑩の自画像では、髪の有無や色や髻の有無は多様で、皺のありかや有無にも違いがあるが、判

明するかぎりでは共通して丸顔であり、頭の形も丸い。一方、他者による自画像としての⑪⑫ - 2⑬は、いずれも実際に北斎を見たことのある者による肖像である。しかも国芳と英泉は同じ浮世絵師であり、殊に国芳は人の特徴を捉えた似顔絵に長じている。鈴木が信憑性ありとするのもこの二者を指すものであろう。しかしこれらの北斎像に共通するのは、面長で痩せ形のごつごつした顔で、特に顔の下半分が長く、鼻が大きく皺が多い。側頭部には髪が残り、骨格もがっしりして見える。

このうち皺は年齢によって変化する。また、髻の有無や髪の色、坊主頭か否かは、本人の年齢や、料理屋の亭主や乞食というような設定によっても変え得るものである。しかし丸顔か面長かという骨格は、年齢や設定によって変わるものではない。自画像の丸顔と、他者の描く面長の差は、何に起因するのだろうか。

(表) 北斎の肖像画

番号	作者	掲載	推定年齢	向き	髪	顔の形	鼻	目	皺	書き入れ・備考
①	北斎	埒外小咄本『間女畑』	22歳頃	七三	黒髪髻	丸顔	平大	小	なし	夢を見る
②	北斎	黄表紙『龜將軍勘略之巻』	40歳	七三	坊主頭	丸顔	普通	垂れ目	額と口元	
③	北斎	黄表紙『児童文殊稚教訓』	41歳	七三	頭巾	丸顔		小	なし	「ごろうじまし、ねたかほつきのやはな事を」
④	北斎	黄表紙『不厨匠即席料理』	43歳	斜め後ろ	黒髪髻	丸顔?		小	なし	料理屋亭主風
⑤	北斎	『略画早指南』	55歳	正面	坊主頭	丸顔	鼻べちや	小垂れ目	なし	
⑥	北斎	嵩山房宛手紙(周幼)	76歳	横顔	後頭部に髪	丸顔?		小	なし	杖を突いた乞食風
⑦	北斎	嵩山房宛手紙(百人一首)	76歳	横顔	蒲団をかぶる	丸顔?		小	なし	百人一首のもじり
⑧	北斎	旧画稿の終わりに	83歳	七三	後頭部に髪	丸顔	鼻?皺?	小垂れ目	額目尻顎	「八十三歳八右衛門右申上候以上」
⑨	北斎	『画本兩筆(兩筆画譜)』	50代後半~	斜め後ろ	後頭部に髻	丸顔				
⑩	北斎	「何屋何兵衛様宛」借金証文	80歳代	横顔	後頭部に髪	丸顔	大	小垂れ目	目の周囲	「眼の小さき鼻之大き成白髪之モジャモジャと致候親父」
⑪	国芳	『日本奇人伝』下巻	80歳代	七三	後頭部に髪	面長	大		眉間目尻口	
⑫-2	英泉	『戯作者考補遺』		七三	後頭部に髪	面長	大		眉間目尻口	為一翁(北斎別号)『新增補浮世絵類考』原因
⑬	猿猴庵	『北斎大画即書細図』	58歳	七三	後頭部に髻	面長	大		口の脇	
⑭	北斎?	人物頭部草稿	63歳?	七三	坊主頭	やや面長	大	小	額口の周り顎	「葛飾の翁」
⑮	北斎?	杖を突いた全身像	75歳?	七三	後頭部に髪	面長	大	小	額目尻口の周り	
⑯	北斎?	胸から上	?	七三	後頭部に髪	面長	大	小	額目尻口の周り	「葛飾北斎翁之肖像」

5 浮世絵師の自画像

ここで北斎以外の浮世絵師が描いた自画像を見てみたい。鈴木春信の弟子で春重とも称した司馬江漢は、生前、払子を取る自画像にあわせて「司馬無言辞世ノ語」を記した死亡通知を摺って流布させた。また、喜多川歌麿の「高名美人見立忠臣蔵」第

十一段目には、義士たちに追い詰められ囲まれた高師直に見立てて、花魁たちに囲まれて大盃を受けることを強要されている色男の姿が描かれ、羽織の紋には「歌」「磨」背後の柱には「応求哥磨自艶顔写」と書かれている²⁸⁾。実際の歌磨が、これほど女性にもてたかどうかは怪しく、このような美男であったとも限らない。それでも当人の顔を知らない多くの享受者にとっては、これが「歌磨の自画像」ということになるのである。

一方、変わった自画像を描く者に歌川国芳がいた。国芳は浮世絵の中に頻繁に自分の姿を描き込むのであるが、そのいずれもが後姿であったり、物の陰に隠れたりして、ことさら顔が見えないように描かれることが知られている。それでも国芳のトレードマークとなる芳桐模様の手拭いを肩に掛けていたり、国芳の好んだ地獄絵の襦袢を着ていたり、これも国芳の好きな猫が傍らに描かれていたりするので本人と判る、顔のない自画像をあえて演出したのである。国芳は「ひらひら」と呼ばれたほど顔が平たかったので、それを恥じて顔を描かなかったという伝聞があるが、無名時代には顔のある自画像も描いているので、これは当たらない。「むしゃ国芳」とうたわれるほど名が知られるようになったからこそこの^{てら}衞いと考えられる²⁹⁾。浮世絵師にさほど多くの作例があるわけではないが、いずれの自画像にもかなりの外連味^{けれんみ}が感じられる。

北斎の場合はどうであろうか。浮世絵師としてのほか、肉筆美人画や黄表紙の作家として、読本の挿絵で売れ、絵手本類を出版して各地に弟子を持ち、江戸や名古屋で巨大達磨の絵を描く興行をして達磨の先生、略して「だるせん」と呼ばれるように、多方面で活躍する有名人であった。その一方で北斎は、奇人変人としても知られていた。虚心の『葛飾北斎伝』にも、改名を繰り返し旧雅号を門人に売りつけ³⁰⁾、「居室を掃除せず、常に弊衣を着し、竹の皮、炭俵など、左右に取り散らし、汚穢極まれば、即居を転じて他に移る³¹⁾」として転居を繰り返したとある。服装も「甚奇なり」として、絹類や流行の服を着ず「あらき手織の紺縞などの木綿を着し、上には柿色の袖なし半天を着し、六尺有余の天押棒を、杖にかへ、草鞋或は麻裏草履をはきて、あるきたり。」と、みすばらしい姿であったとの伝聞を記している³²⁾。

しかしその変人ぶりは、自ら意図したのものである。虚心は北斎の貧乏について「金銭を得るといへども、敢て貯ふの意なく、これを消費すること、^{あたかも}恰土芥のごとし」として、画図の報酬金を、米や薪の売掛金を催促すると包みのまま中も見ずに投げ与えていた例を挙げる³³⁾。転居についても「転居すること、先生の如くなれば、たとひ富有なるも、終に紀要に追はれ、貧窮に陥るべし。」と、転居する代わりに人を雇って家中を掃除させることを勧める弟子に、百回転居した寺町百庵に倣い、百回の転居をして死所を卜すのだと答えたという³⁴⁾。服装のみすばらしさも「翁は暗に田舎漢と言はるゝを得意とせるがごとし。(註32参照)」と、自らの意思に拠るものという。

『葛飾北斎伝』には、三世豊国が両国辺りで書画会を催したものの、雨天で参加者がはなはだ少なかった折のこととして「(北斎)翁は蓑笠をきてわらんじを穿ち、葛飾の百姓が参り候といひつゝ、入り来り、筆を採りて、快く数十葉を画きたりと。(中略)其の洒落、おもふべし。」とある³⁵⁾。奇人変人ぶりには、北斎があえて行った自己演出と考えられる面が少なくないのである。

北斎が自身の奇人ぶりをさらに増幅すべく演出しようという志向を持っていたのなら、その自画像も現実そのままを描いたものとして鵜呑みにするわけにはゆかない。北斎はそれぞれの戯作に合わせて、作品に登場する自分自身を演出し、あえて現実とは異なる姿で描いたのではないか。であるとすれば、国芳や英泉が描いた北斎の肖像と、自身による自画像類との大きな差異を説明することが可能になる。③の黄表紙『児童文殊稚教訓』の添え書きで「ごろうじまし、ねたかほつきのやぼな事を」と笑いものにされる作者や、④『不厨庖即席料理』で粋な料理屋亭主の如く描かれる作者のような演出の延長として、実際の北斎とは似ても似つかないが、いかにも該当戯作にふさわしい容貌、として作者自身の姿を創作したと考えられるのである。

6 手紙中の豆人間と自画像

北斎の自画像として挙げたもののうち、⑥⑦⑧⑩は、戯作の挿絵中ではなく、北斎の手紙内に描かれたものであった。版本の挿絵としての自画像が対外的な読者に向けて演出されたのは、戯作者としていかにもありそうなことだとしても、個人的な手紙中の自画像でも、自己演出は行われたのであろうか。

『葛飾北斎伝』にはかなり多くの北斎の書状が紹介されているが、その中には手紙の内容に関係するちょっとした略画が文中に描き込まれているものがある。例えば天保7年正月17日付嵩山房宛書状³⁶⁾には江戸へ戻ったら借金に行くとの文面に、笠と道中差しを脇に平伏する人物(図18)が、10月23日付嵩山高宛書状³⁷⁾には、「其段真平だ、御高免」の箇所を腕を組んで背を向ける人物(図19)が描かれている。いずれも個性の有無も問えないほど小さな、丸い頭の豆人間である。

また、名古屋市博物館所蔵の文化14年10月16日付永楽屋番頭藤助宛の借金証文にも、「屁クサイ 段々有難こさり升金子式両式分礎二拝受仕ました(以下略)」の傍らに、興を直角に折って「ハイハイ ヘクサでムリ升」と言っている人物(図20)が描かれている³⁸⁾。自身の名北斎を「屁クサイ」と言い換え、卑下した表現にしているのである。そういえば⑥の天保6年2月付嵩山房宛書状の老人も、「右や左りの書林様、



図18 天保7年正月17日付嵩山房宛書状(部分)



図19 10月23日付嵩山高宛書状(部分)



図20 文化14年10月16日付永楽屋番頭藤助宛借金証文(部分)

ア、かなひませぬ、ゑかアきには何も後生と、御ぼしめし、」と自身を老乞食に見立てたものであり、⑦の同時期に百人一首の絵の依頼に関連して嵩山房へ送った書状の自画像も、百人一首の絵札仕立てとはいえ、頭から蒲団を被り足の間に瘦瓶を置くという極めて下世話な姿である。

⑧の旧画稿の余白に書かれた「八十三歳八右衛門右申上候以上」とあるものも、髪はぼうぼうと乱れ、顔中の著しい皺、喉元や手も骨張って皺が多く、老耄を過度に強調しているように思われる。また⑩の80歳代の借金証文も、金を受け取りに行く者としての北斎の顔の「眼の小キ鼻之大き成白髪ノモジャモジャと致候親父」や、三女応為の「腮の四角ナ女」も、相当に自虐的な表現である。借金証文とはいえ「何屋何兵衛様宛」と相手を特定していないのは、このような絵入り手紙を好むパトロン宛のサービスとして書かれたものかもしれない。

手紙内に描かれた自画像は、出版物に描かれた姿よりもさらに過激で自虐的なものであった。これら北斎の私信中の豆人間は、自身を忠実に描いた自画像というよりは、北斎の自己演出により作り上げられた架空の人物像と見るべきであろう。

7 自画像の丸顔の根拠

北斎の肖像画のうち、本人を見たことがあり実際の特徴を捉えていると考えられる、歌川国芳と溪斎英泉、猿猴庵の描いた顔貌が面長であったことに対し、北斎自身による自画像は、出版物においても書簡においても丸顔に描かれていた。北斎が自分のキャラクターを、本人の骨格と似ても似つかない丸顔として表したのは、どのような理由があったのだろうか。

顔をくるっと丸で描く書簡中の豆人間の如く、自画像をあっさり丸い輪郭にしたと考えるには、一部の書簡や版本の自画像は手の込んだものとなっている。例えば⑥や⑦や⑩の書簡中の像は、真横向きという、合わせ鏡を使わなければ自分では見られない自画像には珍しい角度のものである。また、『略画早指南』の後書ゆえにあえて単純な輪郭にしたと思しき⑤以外は、斜め後ろやわずかに上から描くなど、通常とは違う視点が選ばれ、輪郭も単純ではなく頬骨などの凹凸がつけられている。

また、北斎が自分の顔立ちを厭い、丸顔を好んでいたということでもないようである。むしろ北斎の描く人物は、他の浮世絵師に比しても長身で面長であることが特徴となっている。たとえば北斎の美人画は当時から人気が高かったが、北斎の別名に拠っ



図21 葛飾北斎「日本三筆」(部分)(美人画)

て宗理型美人と呼ばれるその作風は、はかなげな長身に目の小さな瓜実顔(図21)³⁹⁾を特徴としていた。また読本の挿絵においても『椿説弓張月』の主人公、源為朝の顔(図22)⁴⁰⁾も、時代の近い歌川国芳の武者絵に比べても相当に長いように、北斎の主人公達はいずれも長身で面長に表され、丸顔はむしろ敵役や脇役の三枚目に用いられているのである。

北斎が自画像を別人物のような丸顔に描く契機として、ひとつ考えられるのは、戯作者山東京伝の影響である。浮世絵師として北尾政演の名も持つ京伝は、黄表紙『江戸生艶気樺焼』の主人公を不細工な獅子っ鼻の男として設定したが、この作品が有名になりその獅子っ鼻が京伝鼻とまで呼ばれるようになったところから、戯作中の自身の顔(図23)⁴¹⁾にもこの鼻を用いて、トレードマークのようにしていた。しかし肖像画で見る限り、実際の京伝は鼻筋の通ったなかなかの美男子のようである。本人を知る人々は、実物と作中の作者像との落差を面白がっていたのかもしれない。

かつて北斎が、京伝の黄表紙『桃太郎発端話説』や『実語教幼稚講釈』『貧福両道中之記』『化物和本草』等の挿絵に携わっていたのは、そのような時期であった。実物の京伝にも会っていたはずであり、挿絵中の京伝鼻の作者像と実像との差異を知らないはずがない。あえて自身とは異なる「作者の自画像」を描くという、有名人ゆえに意味を持つ韜晦のしかたを、このような京伝のふるまいに学んだのではないかと想像する次第である。

北斎の肖像画のうち、多くの自画像と他者が描いた肖像との間には、同一人物を描いたとは思えないほどの相違があった。他者が描いた肖像のうち、北斎を知る歌川国芳、溪斎英泉、猿猴庵の肖像では、共通して面長の顔貌に描かれている。これに対して自画像はいずれも丸顔に、ときに自虐的な自己演出のもとに描かれている。北斎はなぜ実物通りに描かなかったのか、その理由として、あえて自らを醜い京伝鼻に描いた山東京伝の発想に倣った可能性を挙げておきたい。



図22 葛飾北斎『椿説弓張月』より源為朝(武者絵)



図23 山東京伝『人間一生胸算用』より京伝鼻の京伝自画像

注

- 1) 尾崎久弥「北斎肖像の研究」『浮世絵研究』(旧刊)第6号 pp.47-56 1932年
- 2) 鈴木重三「北斎肖像画のいろいろ」『浮世絵芸術』第10号 pp.25-26 1965年
- 3) 次の絵も旅立つ姿の自画像だが、笠で鼻と口しか見えないとして、尾崎は数に入れない。

- 4) 飯島半十郎(虚心)『葛飾北斎伝』蓬枢閣、1893年上巻第五十五丁表にも掲載されるもの。
- 5) 飯島半十郎(虚心)『葛飾北斎伝』蓬枢閣 1893年(鈴木重三校注で1999年に岩波文庫として再刊)
- 6) ライデン国立民族学博物館所蔵 所蔵番号 RV-3513-1496
- 7) 福本和夫「北斎の肖像画について」『福本和夫初期著作集』第5巻 pp.336-343 こぶし書房2008年(初出『北斎の研究』上 1943年)
- 8) 福本が2例目として挙げる天保二年二月中旬絵手紙中の「粗画の全身立像側面の自画像」とは、尾崎が挙げた⑥の嵩山房宛手紙中のものと思われる。
- 9) 出典は書かれていず、不明。
- 10) 朝日新聞1998年9月2日 朝刊30面(社会面)「北斎描いてた自分の横顔」
- 11) 再発見の経緯と小布施での経過については久保田洋一「図版解説27」『北斎娘 応為栄女集』pp.89-92、に詳しい。
- 12) 毎日新聞1994年9月14日付。この絵自体の解説と、これを否定する朝日新聞同年11月11日の記事については、久保田洋一「図版解説17」『北斎娘 応為栄女集』pp.74-76に拠った。
- 13) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%91%9B%E9%A3%BE%E5%8C%97%E6%96%8E> 2015年8月26日 引用元と思われる visipix.com には Head of an old man として北斎の作品として掲載されている。
- 14) 別紙に切り抜いた絵部分を貼りつけ合わせ目に印が押され、草稿の一部に見える。袖なし羽織の模様は淡墨、皺だらけの顔には代赭で隈が入れられ、比較的詳細な筆描きである。この時期の他の自画像類の「好々爺然としたイメージ」とは隔絶しているので、自画像である根拠を探し求めたのであるが、現状では見つけ出せていない。
- 15) 『葛飾北斎伝』下巻第十九丁裏 - 第二十丁表(岩波文庫版 pp.221-222)
- 16) 『新增補浮世絵類考』1889年版。
- 17) 鈴木に拠れば、肉筆の原画は高松市の個人蔵となっていたが戦災で失われたという。
- 18) 『戯作者考補遺』国本出版社 1935年復刻本 p.318の次の図。
- 19) 国立国会図書館蔵 所蔵番号 WA31-12
- 20) 久保田洋一「図版解説16」『北斎娘 応為栄女集』pp.73-74。
- 21) 名古屋市博物館所蔵。本図については名古屋市博物館資料叢書3 猿猴庵の本『北斎大画即書細図・女曲採要集』名古屋市博物館 2004年、の解説に拠った。
- 22) 1901年、小林文七発行の私家版。
- 23) Various Facesとして、F1904.268の番号で所蔵される。フリアが小林から1904年に購入し、同ギャラリーに寄贈したもの。
- 24) Wikipedia に自画像として掲載されるモノクロームの全身像は、同図の写真版か写しかと思われる。これが自画像でないとする理由もギメ本と同様である。
- 25) 久保田洋一「応為栄女の諸伝」『北斎娘 応為栄女集』pp.126-143の末尾部分
- 26) 井上雨石「北斎の肖像に就て」(『浮世絵之研究』第5号 p.16 1922年)に、⑥の肖像が隣家の老人のものであると虚心が言ったという記事が紹介されている。
- 27) 『北斎研究』20号 pp.130-135 1996年
- 28) 松原茂「画家の自画像」『日本の美術』386号「画家・文人たちの肖像」pp.24-25 1998年
- 29) 山本陽子「後ろ姿の自画像について—歌川国芳の作品を中心に—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科]第13号 pp.31-39、2005年。
- 30) 『葛飾北斎伝』上巻第十五丁表(岩波文庫版 p.55)
- 31) 『葛飾北斎伝』下巻第一丁裏(岩波文庫版 p.182)
- 32) 『葛飾北斎伝』下巻第十二丁表裏(岩波文庫版 p.206) ちなみにこの出で立ちは、⑤の杖を突く肖像と符合する。このような服装の老人が江戸にそれほどやたらと居たとも思えない。
- 33) 『葛飾北斎伝』下巻第八丁裏 - 九丁表(岩波文庫版 pp.197-198)
- 34) 『葛飾北斎伝』下巻第二十一丁裏 - 二十二表(岩波文庫版 pp.226-227)
- 35) 『葛飾北斎伝』上巻第六十五丁裏(岩波文庫版 pp.166-167)
- 36) 『葛飾北斎伝』上巻第五十七丁表(岩波文庫版 p.148)

- 37) 『葛飾北斎伝』下巻第二十五丁表 (岩波文庫版 p.223)
- 38) 名古屋市博物館資料叢書3 猿猴庵の本『北斎大画即書細図・女曲採要集』p. 4名古屋市博物館 2004年
- 39) 葛飾北斎「日本三筆」国立国会図書館所蔵
- 40) 葛飾北斎挿絵『椿説弓張月』第五十六回第七丁表 国立国会図書館所蔵
- 41) 山東京伝作・画『人間一生胸算用』下巻第五丁裏 早稲田大学図書館所蔵

* なお、本論の資料と発想は、国際交流基金巡回展「マンガ・北斎・漫画:現代日本のコミックから見る『北斎漫画』の遺産 (仮) 第2章キャラクターとしての北斎 (仮)」に向けて、山本が提供した資料と情報に基づくものである。ただし山本は、同展の展示内容・キャプションについて関知するものではない。(2015年10月8日提出)

図版出典

- 1 武藤禎夫編『安永期艶笑噺本六種』p.124 太平書屋 2000年
- 2 『葛飾北斎小説集：覆刻及び活字化』p.40 北星出版社 1978年
- 3 『葛飾北斎小説集：覆刻及び活字化』p.67 北星出版社 1978年
- 4 『葛飾北斎小説集：覆刻及び活字化』p.121 北星出版社 1978年
- 5 立命館大学アート・リサーチセンター所蔵 所蔵番号 Ebi0369
- 6 飯島虚心『葛飾北斎伝』上巻第五十五丁表 国立国会図書館所蔵
- 7 飯島 虚心『葛飾北斎伝』下巻第十四丁表 国立国会図書館所蔵
- 8 ライデン国立民族学博物館所蔵 所蔵番号 RV-3513-1496
- 9 『画本両筆(両筆画譜)』最終丁半丁 国立国会図書館所蔵
- 10 久保田一洋『北斎娘応為栄女集』図版27 藝華書院 2015年
- 11 『日本奇人伝』下巻第三十四丁表 国立国会図書館所蔵
- 12 『戯作者考補遺』国本出版社 1935年復刻本 p.318の次の図
- 13 「北斎仮宅之図」国立国会図書館所蔵 所蔵番号 WA31-12
- 14 『北斎大画即書細図・女曲 採要集』p.23 名古屋市博物館 2004年
- 15 Various Faces フリア美術館所蔵 所蔵番号 F1904.268
- 16 Catalogue of the exhibition of paintings of Hokusai (1973年 Minkoff Reprint の復刻版) 第191図
- 17 Catalogue of the exhibition of paintings of Hokusai (1973年 Minkoff Reprint の復刻版) 口絵
- 18 葛飾北斎伝』上巻第五十七丁表 国立国会図書館所蔵
- 19 『葛飾北斎伝』下巻第二十五丁表 国立国会図書館所蔵
- 20 『北斎大画即書細図・女曲採要集』p. 4名古屋市博物館 2004年
- 21 葛飾北斎「日本三筆」国立国会図書館所蔵 所蔵番号寄別 2-9-1-11
- 22 『椿説弓張月拾遺』巻之五第七丁表 国立国会図書館所蔵
- 23 『人間一生胸算用』下巻第五丁裏 早稲田大学図書館所蔵